

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 20 日現在

機関番号：34316
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2013～2016
 課題番号：25380806
 研究課題名(和文)生活型福祉施設のケアワーク構造とソーシャルワーク

 研究課題名(英文)Residential Social Work offered with Care Work

 研究代表者
 土田 美世子 (TSUCHIDA, MIYOKO)

 龍谷大学・社会学部・教授

 研究者番号：90310755
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：生活型社会福祉施設で実践されるケアワークの専門性について探求した。施設ワーカーが実践するケアワークは、施設利用者の生活の質を大きく左右するにもかかわらず、その専門性については明確になっていない。本研究では、ワーカーの見習いである社会福祉実習生、新人職員、中堅職員、ベテラン職員に対してその職務について調査を行い、それぞれを比較検討することで、ワーカーが専門性を獲得していく要因について検討した。その結果、ワーカーの専門性の獲得と、ソーシャルワークへの意識が関連することが示唆された。

研究成果の概要(英文)：We studied about Residential Care Work carried out by Social Work Professions. Handicapped residents in social welfare institutions need personal care for their daily lives. Therefore, the quality of care deeply influence their quality of lives. However, it is unclear which elements are necessary for professional Care Work.
 We researched the difference the quality of Cares carried out the different type of Workers; internship students in Social Work Course, freshmen for Residential Work, Some skilled Workers and Expert Workers for Residential Social Work. We found out Social Work mind is necessary for the professional Residential Care Work.

研究分野：児童福祉専門職の専門性

キーワード：ケアワーク ソーシャルワーク 生活型福祉施設

1. 研究開始当初の背景

今日、生活型福祉施設での支援は、利用者の生活の保障・安寧の実現を基盤として、利用者個々の「自立支援」に向けて実施することが求められる。日常生活において提供されるケアが自立支援の実現に向けて実施されるためには、利用者のアセスメントに基づき、利用者主体の価値の元提供されることが必要であり、この実現には高い専門性を要する。なお、アセスメントに基づき社会福祉の価値の元に実施されるケアを、本研究ではケアワークとして区別して用いる。一方、利用者の「身の回りのお世話」としてのケアは、生活型施設に入所するまでは多くは専門家ではない家族によって提供されていたこともあり、ケアワークの専門性について社会的に認知されているとは言い難い。

生活型施設で利用者の自立支援に向けて実施されるソーシャルワーク支援は、生活場面での相談(生活場面面接)、アセスメント等、ケアワークに付随して実施されることも多い。このため、生活型施設におけるソーシャルワークとケアワークの関連、差異については様々な議論があるが、実際の施設での支援場面に基づく調査研究はあまり例がない。

本研究では、生活型社会福祉施設で実践されるケアワークと、その背景にあるソーシャルワークについて調査を行う。

2. 研究の目的

本研究の目的は、生活型施設でのケア項目に焦点をあて、**ケアワークとソーシャルワークとの関係**を明確にし、それによりケアワークの専門性について描き出すことである。このため、生活型施設現場でのケアワーク実践について調査し、その構造を分析し、ソーシャルワークとの関連について考察する。

また、ケアワークの専門性が獲得される要因を、勤務経験、資格、支援対象とする利用者の違い等 様々な角度から検討する。ソーシャルワークとケアワーク両者の関係を明確にし、専門性に関わる要因を明確にすることで、生活型施設の支援の専門性の向上に貢献できると考える。

3. 研究の方法

本研究は、(1)社会福祉現場での実習生に対するアンケート調査 (2)生活型施設に勤務するワーカーに対するインタビュー調査 (3)生活型施設ワーカーに対する質問紙調査、の3つのパートから成る。以下、各パートについて述べる。

(1) 社会福祉現場での実習生に対するアンケート調査

社会福祉士の実習はソーシャルワークを学ぶことを目指すが、具体的な実習項目は「ケアワーク」であることも多い。調査では、実習でのケアワークの経験と、ソーシャルワ

ークの学びの関連について抽出することを目的とした。

調査時期及び対象

2013年9月(pre調査)、及び2013年12月~2014年1月(post調査)に、社会福祉施設で3週間の実習を経験する実習生183名に対し自計式の質問紙調査を実施した。

調査内容

調査票は、先行研究を精査し、研究チーム4名で協議の下作成した。

pre調査では、実習に入る前の実習生のケア経験、プロフィールと共に、ソーシャルワークについての理解、多次元共感性尺度(鈴木、木野、2008)を用いた個人の共感程度について資料を得た。

post調査においては、実習で経験したケア項目、ソーシャルワークの学びについて詳細に回答を求めると共に、pre調査と同じ項目を用いてソーシャルワークの理解についてたずね、pre-postでの変化を検証した。

調査手順

pre調査は、調査者が被調査者179名を一室に集め、調査趣旨について説明し、同意が得られたものについてその場で回答を求め、調査票を回収した。回収率は100%であった。

post調査は、授業担当の教員を通じて調査票の配布・回収を依頼した福祉現場での実習を行ったpost調査の対象者は173名、回答を得られたのは170名で、回収率は98%であった。pre-postの集計においては、対応が可能な170名分のみを分析対象とした。

(2)生活型福祉施設ワーカーに対するインタビュー調査

調査時期、及び対象

インタビュー調査は2013年8月~2016年2月にかけて実施した。調査対象は、3年以内の若手ワーカー9名(勤務先の利用者別では、児童:5名、障害者:2名、高齢者:2名)、5年目の中堅ワーカー2名(児童:1名、高齢者:1名)、及び15年以上の経験を持つベテランワーカー9名(児童:3名、障害者:3名、高齢者:3名)、及び施設長4名(児童:2名、障害者:1名、高齢者:1名)、計24名であった。

調査内容

「生活型福祉施設で実施されるケア」について、基本的に1対1での半構造的インタビュー調査を実施した。若手・中堅の職員に対しては、新人の頃に困難と感じたケアの内容、新人時代と比較して習熟したケアの内容、利用者のケアに関して心がけていること、について質問し、入職したところからの変化、獲得したスキルについて抽出した。また、ベテラン職員、施設長に対しては、上記と併せて、自分を専門職だと感じるところ、新人の指導の留意点、家庭でのケアと施設でのケアの違いについてもたずねた。

調査手順

あらかじめ文書で調査を依頼し、承諾を得たワーカーに対し、勤務先、又は大学施設に

において、1人2時間前後のインタビュー調査を実施した。インタビュー内容は、逐語録に起こし、IBM SPSS Text Analytics for Surveyを用いテキスト分析により抽出された単語を手がかりに、ケアのスキル、及びソーシャルワーク支援との関連について考察した。

(3)生活型施設ワーカーに対する質問紙調査
調査時期および対象

2017年1月末に、近畿圏の生活型福祉施設、児童福祉施設 151、障害者支援施設 333、高齢者福祉施設(特別養護老人ホーム、養護老人ホーム)516か所、計 1000か所に自計式の調査票を郵送した。

調査内容

(1)、(2)の調査から、ソーシャルワーク支援に関連すると思われる「支援内容」及び「利用者をケアする際の視点・留意点」「支援者としての理念・価値」についてピックアップし、調査項目を作成した。調査項目は55項目、それぞれの項目に対して「全くそう思わない」から「非常にそう思う」までの5件法で回答を求めた。この他、回答者の勤務年数、勤務施設種別、職名、保持する資格等、フェイスシート項目をたずねた。

調査手順

調査票は、調査趣旨の説明と依頼文を添えて返送用封筒と共にファイルにセットし、各施設長宛てに3セット送付した。施設長宛ての依頼文に調査の趣旨を説明し、新人・中堅・ベテラン職員に、それぞれ回答してほしい旨を依頼した。回答は、2017年2月末までに、回答した職員毎に返送を求めた。

送付した調査票は、1000施設×3通、計3,000通であった。回収できたのは、児童福祉施設 246(回収率 54.3%)、障害者支援施設 340(回収率 34.0%)、高齢者福祉施設 573(回収率 37.0%)、全体では1,159通、回収率 38.6%であった。

4. 研究成果

(1)実習生に対するアンケート調査

実習後のソーシャルワークの理解程度と、実習で利用者へのケアワークの経験の有無とは、直接的には関連が見られなかった。

一方、ケアワーク経験と利用者理解の有無、また、ソーシャルワークの理解程度と利用者理解の有無、及び利用者との関係構築の有無について関連が確認できた。このことから、

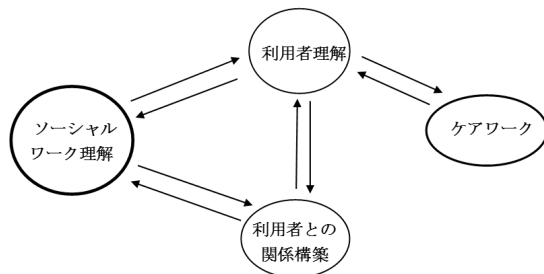


図1. ソーシャルワーク理解とケアワークの関係

実習生が、ケアワーク実践により利用者理解を通じて、ソーシャルワーク理解を深めることが示唆された(図1.参照)。

(2)生活型福祉施設ワーカーに対するインタビュー調査

新人職員に対するインタビュー調査

児童・障害者・高齢者それぞれの生活型施設に勤務して3年以内のワーカーに対し、職務・利用者との関わりにおける困難、1年目・2年目での変化について質問した。新人職員については、比較対象のため、通所型施設の職員に対してもそれぞれ同様の質問をした。

結果、新人職員の困難は、通所・入所に関わらず、利用者・職務の知識・情報不足による困難、自分なりの関わりスタイル、職務を行う際の価値観を確立していく過程での困難であることが分かった。

中堅職員に対するインタビュー調査

生活型福祉施設の職務について、4年以上10年未満の中堅職員に対してインタビュー調査を実施した。

中堅職員の回答は、新人時代に利用者に対して「できていなかったと」が、「現在ではできるようになった」ことの対比として多く語られた。また、新人に対する指導、実習生の指導など、自分の業務を客観的に視ることができるようになったことの影響が語られた。新人・中堅に共通していたのは、モデルとなる職員の重要性についてであった。

ベテラン職員へのインタビュー調査

ベテラン職員の支援に共通していた内容は、「利用者主体」が支援の中心に置かれていることであった。新人時代から現在に至る支援の経過は非常に個別的であったが、困難を感じたときに指針とする方法論や理念を保持していたこと、利用者に対して「ぶれない存在であること」の重要性、支援者である

表1. 新人期の困難

子ども	25	気持ちの変化に振り回される、関係に入り込みすぎる、理解できていない、問題に目が行ってしまう、求めていることを提供できない、余裕がなかった...
対応	9	その場の対応に振り回されていた、個別対応しか考えられない(中堅)...
わからない	6	子どもとの接し方、どうすれば指示が入るか、子どもが何を不安がっているのか...
保護者	6	保護者からの苦情対応、何を連絡すればいいのか、保護者の逸脱行動、理解...
学校	5	学校へ行かない子の支援、学校との関係が取れない、学校での逸脱行動...
違い	5	自分の育った環境、自分の価値観、施設のルール、持っていたイメージ...
自己満足	3	自分が対応していることに自己満足していた(中堅)
先輩	3	先輩にできていることが自分にはできず子どもに申し説ない(中堅)

* 67レコード中、50レコード(74.6%)を説明

表2. 新人期の特徴

抽出したワード	個数	ワードが付随する内容(一部抽出)
子ども	14	先入観で対象化しすぎる、要求に応えすぎる、発信していることに気が付かない、子どもが自分の言うことは聞かないことを落とし込めない...
思い	10	強い思いがある(4)、自分の思いが優先する、思いがけないのは論外...
できないこと	9	一朝一夕にはできない、先輩に比べてはできない、新人にしかできない...
関係性	6	結果をすぐに求めすぎる、1人にできても全員にできない、他に影響する...
距離	4	子どもとの距離の取り方がわからない、やりたいたいこととやれることとの距離...
見通し	4	全体を見通した動きができない、落とし込んだ日常の関わりができない...
揺らぐ	3	子どもから攻撃されることで揺らいでしまう、いちいち揺らいではいけない

*56レコード中、39レコード(69.4%)を説明

前に、人間として成長していく必要性について語られた。また、それぞれアドミニストレーション業務に関わっており、チームとして支援にあたることの重要性についても強調された。

テキスト分析

利用者の違いによるワードの出現数が異なるため、テキスト分析は、児童・障害・高齢の施設ごとに実施した。児童養護施設に勤務する新人・中堅ワーカー(計4名)の「新人期の困難(表1.)」、及びベテランワーカー(計3名)の「新人期の特徴(表2.)」について、対比して示す。

PCソフトを用いたテキスト分析による無作為な抽出と、調査者の作為的なキーワード抽出の両方を実施することは、質的調査に客観性取り入れるうえで有効であった。

(3)生活型施設ワーカーに対する質問紙調査
勤務経験の年数による、専門性の深まり
勤務経験年数の回答を、1年~3年(新人)、4年~10年(中堅)、11年以上(ベテラン)に三分割し、各質問項目とのクロス集計を行った。なお、質問項目の回答についても、5件法の回答を「該当しない」「どちらともいえない」「該当する」の三分割にまとめ直した。

新人、中堅、ベテランと、勤務経験に従って「該当する」という回答が増え、「該当しない」という回答が減少したのは、「社会制度について理解している」「自分の意見表明の機会がある」「支援の根拠を説明できる」「他職種を理解している」「必要なら同僚の支援を改善しようとする」などの項目であった。一方、「自分の人生経験を用いた支援」には、勤務経験での差は見られなかった。

表3. 勤務経験×項目の該当度

*()内は、勤務経験内での割合

		新人	中堅	ベテラン
社会制度理解	該当	161(42.6)	243(52.8)	311(74.6)
	非該当	67(17.7)	40(8.7)	12(2.9)
	中立	149(39.4)	175(38.0)	91(21.8)
意見表明の機会	該当	261(69.0)	371(80.7)	362(86.8)
	非該当	34(9.0)	27(5.9)	14(3.4)
	中立	83(22.0)	62(13.5)	41(9.8)
支援の根拠	該当	203(53.7)	354(77.0)	364(87.3)
	非該当	36(9.5)	16(3.5)	6(1.4)
	中立	139(36.8)	88(19.1)	45(10.8)
他職種理解	該当	247(65.3)	334(72.6)	345(82.7)
	非該当	36(9.5)	21(4.6)	10(2.4)
	中立	91(24.1)	105(22.8)	62(14.9)
同僚の支援改善	該当	224(59.3)	355(77.2)	363(87.1)
	非該当	26(7.4)	20(4.3)	3(0.7)
	中立	126(33.3)	85(18.5)	51(12.2)
人生経験の活用	該当	199(52.6)	222(48.3)	232(55.6)
	非該当	60(15.9)	75(16.3)	42(10.1)
	中立	119(31.5)	163(35.4)	143(34.3)
人数計		378	460	417

「施設職務をソーシャルワークであると感じる」と関連する要因

「施設職務は、ソーシャルワークであると感じる」という設問に対する回答を従属変数、その他の項目の回答、及び、勤務年数、年齢、保持する資格を独立変数とする重回帰分析を行った。変数は、強制投入とした。

重回帰分析の結果、重決定係数は.275であり、1%水準で有意な値であった。独立変数から従属変数への標準回帰係数のうち、有意であったものについて表4.に示す。

表4. 重回帰分析結果

利用者の経歴を考慮した支援	.081**
利用者についての情報共有	-.072*
ソーシャルワークとケアワークは一体的	.226**
支援計画に利用者の思いを反映	.099*
申し送り情報を考慮して支援	-.075*
失敗を教訓として支援する	.089*

* $p < .05$, ** $p < .01$

「利用者の経歴を考慮した支援」、「支援計画に利用者の思いを反映させる」については、ソーシャルワークの「利用者主体」の価値観のもと実施されていることが予測される。また、「利用者についての情報共有」「申し送り情報を考慮した支援」は、施設職員のチームとしての支援が重視されていること、利用者の生活の全体性・連続性を考慮した支援が実施されていることが予測される。これは、利用者の全体性を視野に入れた支援という、ソーシャルワークの価値と重なるところである。「失敗を教訓とした支援」は、全ての分野の利用者支援において強調されている視点である。この項目と「施設職務はソーシャルワーク支援と感じる」との間に関連が確認できたことは意義深い。一方、勤務年数、保持する資格等、支援の専門性に関わると予想していた項目とソーシャルワーク支援との関連は見られなかった。以上の点は、今後さらに分析を進めて考察していきたい。

(4)総括と今後の課題

インタビュー調査とアンケート調査の結果から、施設の職務が勤務経験により理解が深まり、実施できると感じる内容が増えていくこと、施設の職務がソーシャルワークを意識して実施された場合、利用者主体、利用者の全体性を視野に入れた支援、連携と情報提供を重視したチームとしての支援に向かうことが示唆された。

ケアワークがソーシャルワークの価値に基づき実践されるということは、利用者の現在を受け止めながら、利用者理解につながる過去、よりよい未来を見据えた支援が実施されることである。このケアワークの広がりや深まりのイメージを、図2に示す。

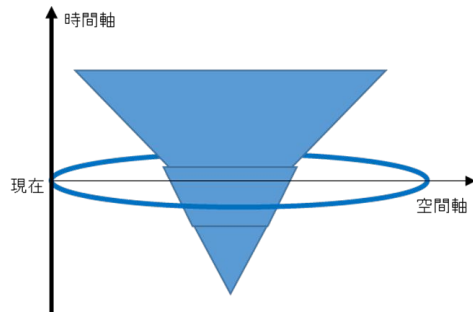


図2. ケアワークの専門性の広がりと深まりのイメージ

つまり、利用者の生活歴、長期的目標を視野に入れたケアが日々実践されるとき、ケアはケアワークとしてソーシャルワークと連続することができるといえよう。

ソーシャルワークのスキルには、知識的スキルと属人的技術があるとされるが(平塚, 2004), 施設におけるケアワークにもこの両側面があると考えられた。ケアの質を左右する利用者理解, 利用者との関係性の深まりは、

利用者に関する知識, コミュニケーション技術等に関する知識の増加だけでなく, 利用者の置かれた環境に対する共感的理解, その前提となるワーカー自身の育ってきた家庭と自己の価値観との関係への理解を含む自己覚知を通してなされる, 属人的技術の深化を必要とする。ケアワークのスキルを習熟するためには, 利用者から学び自らも成長するという双方向の視点に立ち, ケアワーク実践の振り返りを積み上げていくことが必要であることを結論付けた。

一方, ソーシャルワークの視点獲得のための具体的な要件については, 現段階では明確にできていない。今一度, 調査結果を分析し, 加えて新たな調査を行うことで, ソーシャルワークとケアワークの関連に具体的に關わる項目について検証していきたいと考える。

<引用文献>

鈴木有美、木野和代、多次元共感性尺度(MES)の作成 - 自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて -、教育心理学研究、第56巻、第4号、2008、487-497

平塚良子、ソーシャルワークにおけるスキルの意味、岡本民夫・平塚良子編著、ミネルヴァ書房、ソーシャルワークの技能 - その概念と実践、2004、1-20

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

土田美世子、高松智画、ソーシャルワーク理解とケアワークとの関連、龍谷大学社会学部紀要、査読無、47巻、2015、1-13

近藤真由子、相談援助実習を履修した学生の意識調査についての一考察：学生の変化

に着目して、龍谷大学社会学部紀要、査読無、45巻、2014、37-50

土田美世子、ソーシャルワークとケアワークの共通基盤、龍谷大学社会学部紀要、査読無、43巻、2013、83-90.

[学会発表](計 4 件)

土田美世子 児童養護施設職員のケアのスキル習得とソーシャルワーク 日本社会福祉学会 64回全国大会 2016年9月11日 佛教大学

土田美世子、高松智画 実習におけるソーシャルワーク理解とケアワークとの関連 日本社会福祉学会 63回全国大会 2015年9月20日 久留米大学

土田美世子 社会福祉実習生の共感性とソーシャルワーク理解との関連 日本地域福祉学会 2015年6月21日 東北福祉大学

土田美世子 児童福祉施設におけるケアワークとソーシャルワーク 日本子ども家庭福祉学会 2015年6月7日 関西学院大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

土田 美世子 (TSUCHIDA, Miyoko)
龍谷大学・社会学部・教授
研究者番号：9031755

(2) 研究分担者

高松 智画 (TAKAMATSU, Tomoe)
龍谷大学・社会学部・准教授
研究者番号：60226917

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

近藤 真由子 (KONDOU, Mayuko)
須賀 亮司 (Suga, Ryouji)